

想ぞう力のたいせつき

御津南部小・4 西村 智稀

世の中には、いろいろな人がいる。足が速い人、字を読むのが苦手な人、算数が苦手な人。そんな中で「想ぞう力を使うのが苦手な人」という言葉に、ぼくはとてもきょう味を持った。そして、「この子のことかな」と、友だちの顔が一人うかんだ。

ぼくの周りには、クラスみんなでいどうをする時に、わざとゆっくり動いて先生をこまらせる友だちがいる。ぼくが、

「早くして、おくれちゃうよ。」  
と声をかけると、

「うるせーな、だまれ、しね。」

と言い返されて、いつもいやな気もちになった。でもすぐに、仲のいい友だちが、

「ちゃんとしようよ。」

とぼくの味方をしてくれた。だから、そこまで落ちこむことはなかった。

本の最初にも書いてあるように、世の中には、いろいろな人がいる。ひどいことを言う人もいれば、ぼくを助けてくれるひともある。だからこそ、ぼくといっしょにいてくれる友だちを、大切にしたいと思った。

そして、考えた。ぼくは「想ぞう力を使うのが苦手な人」になっ  
ていないだろうか。

ぼくがイメージする「想ぞう力を使うのが苦手なひと」は、①ひどいことを言う人、②すぐにおこる人だ。③はあまりしていないと思う。ぼくは自分から人をきずつけることは言わない。でも、相手から言われたり、何かされたりすると、つい言い返してしまう。だって、言われっぱなしだとくやししいし、相手が先に言ってきたんから、言い返しても仕方がないと思ってしまう。でも、本を読んで、このやり方はあまりよくないと気づいた。このままじゃ、ぼくも、「想ぞう力を使うのが苦手な人」になっちゃうかもしれない。

本には、人は足があるから動ける。動くかどうかは自分で決められる。そして気持ちも同じで、「どこにおくか」を自分で選ぶことができる。と書かれていた。

ぼくは体を動かすのはとく意だけど、気持ちのおき場所を「いかり」から「冷静」に動かせるように気をつけていきたいと思う。

この本をよんで、気持ちのおき方ひとつで自分の行動や言葉が変わることを知った。これまでのぼくは、少しだけ「ひとりよがり」だったのかもしれない。でも人と関わる中で相手の気持ちを考えたり、場面に合わせて気持ちを切りかえたりすることが、とても大切だと思った。

想ぞう力は絵をかいたり、何かを思いうかべたりするだけじゃない。人の気持ちを感じたり、行動を選んだりする力も「想ぞう力」なんだと知った。

これからのぼくは、想ぞう力を少しずつ身につけて、人の気持ちにも自分の気持ちにもやさしくなれるように成長していきたい。